【分掌評価】

令和6年度　山形県立小国高等学校　学校評価書（自己評価・学校関係者評価）

校　訓	「自律・忍耐・向上」
メインテーマ	「挑め、ともに！」
学校教育目標	1　郷土に誇りと愛着を持ち、学び続けながらよりよい地域づくりに主体的に関わる人材を育成する。 2　健康で豊かな人間性を持ち、新たな価値創造に挑む人材を育成する。 3　多様性や個性を認め、他者を尊重しながら協働できる人材を育成する。
学校経営方針	小規模校のよさを生かし「生徒一人ひとりが輝く活気ある学校」を実現する。 ＊＊＊　育成したい資質・能力　＊＊＊（学校教育目標の実現のために） 1　主体性　「自己理解・自己肯定感・学ぶ意欲・計画力・意思ある選択・創造的市民性」 2　挑戦心　「情報収集活用力・課題設定力・共感力・思考力・創造力・行動力・やり抜く力・伝える力・振り返る力」 3　協働力　「受容力・対話力・共創力・持続可能性意識・グローカル意識」

達成度
A：達成できた
B：ほぼ達成できた
C：やや不十分である
D：不十分である

重点目標	重点目標の達成度	重点取組	具体的方策	具体的方策の達成度	年度末達成状況	評価の根拠：実現された生徒や学校の姿　等
1　個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実及びキャリア教育の推進	B	① 国指定事業の充実と白い森未来探究学の深化により、持続可能性の高いカリキュラムを開発する。	○教科横断型授業の持ち方を充実させ、次年度以降につながる方針を確立させる。 ○白い森未来探究学での生徒一人ひとりの学びを深め、教科学習との関連を強める。	A	○国事業3年間の実践から、成果と課題をまとめ、次年度以降のカリキュラムの方針を確立した。 ○白い森未来探究学の持ち方を改善・検討し、小国高校の特色ある授業となっている。	○国事業実践報告会を実施し、振り返りとまとめを行い、外部の方への発表において良いフィードバックを得た。 ○白い森未来探究学2・3年マイプロが、ゼミ形式の活動によって丁寧に見ることができ、活動の自由度が上がった。
		② ICTを活用し、個別最適な学び・協働的な学び、教科等横断的な学習を実践することにより、本校生に育みたい資質・能力を伸ばす。	○生徒の学ぶ力（自学自習力）をつけるための教員の手立て・仕掛けを行い、学習の動機付けを行う。 ○各教科の学習の個性化、指導の個別化について探究し、実践する。	B	○教科横断型授業の充実により、教科への興味・関心の向上が図られた。朝学習や教科授業で個別最適な学び・協働的な学びを実践し、生徒の学習について小国高校の目指す姿が共有できた。	○教科横断型授業の各授業前後の生徒の考え方の変化や深まりが見られた。 ○国事業実践報告会での活動の振り返りを通して、更なる授業実践や生徒に身につけさせたい姿を共有した。
		③ 地域や企業・大学等と連携したキャリア教育や体験的教育活動を推進し、キャリア意識を醸成する。	○3年間を見通した「白い森人育成プログラム」に基づき、地域や企業と連携した学びの機会を設ける。 ○進路ノートを活用し、探究と進路の往還を図り、白い森未来探究学の更なる充実を目指す。	B	○白い森人育成プログラムに基づき、地域や企業の方々から学び、進路意識を向上させることができた。	○ハタラトーク！や白い森未来探究学での協働をきっかけにマイプロや自分の進路について考えを深めている生徒がいる。
		④ 個々の進路希望の実現を目指し、面談等を通じて意欲的・計画的な学習態度を涵養する。	○面談や白い森学習支援センターとの連携を通じて、生徒の高い進路意識を涵養し、学習意識の向上を目指す。 ○朝学習等を通じて、生徒の学習習慣の定着を図る。	B	○担任面談、朝学習、個別指導等が効果的に働き、3学年において進路決定100%となった。 ○1・2学年においては、朝学習による朝の学習習慣が定着し、今後、更に学習習慣が向上することが期待できる。	○3年生が積極的に面接指導のお願いや学習内容の質問をしている様子が見られた。 ○朝学習で生徒それぞれに必要な学習内容を計画立て、学習している。自学で学習するための問題集が不足しているという生徒の声もあり次年度に向け検討している。
		⑤ 図書館等の活用により、高い教養と豊かな心の醸成を図る。	○朝学習時間に朝読書を取り入れ、読書の大切さ等を指導する。 ○校内読書感想文コンクール、読書会等の読書活動推進のための取組みを実施する。	B	○朝読書による読書習慣の定着、一斉読書会による読書への意識向上につながった。	○朝読書の定着で読書に対する抵抗感が小さくなったように見える。 ○読書会は今年のやり方の方が自分のためになって良かったという声が多く得られた。
2　生徒一人ひとりの発達を支え、社会的資質・能力を育む生徒指導の充実	B	① あいさつの励行や基本的生活習慣の確立に向けた援助・助言を行い、自律した社会人としての基礎固めを行う。	○生徒会執行部や生徒委員会（HR生活委員会）等が中心となり、生徒主体であいさつし合う活気ある雰囲気の醸成を図る。 ○集会やホームルーム等、様々な場面でルール・マナーについて考えさせる。 ○保健室来室時には、生活習慣の振り返りを行う。 ○検診結果や来室状況を踏まえた保健指導を実施する。	B	○挨拶運動や目安箱等の生徒会による自主的な活動、全校集会やホームルーム等で学校や地域社会におけるルール・マナーについて問いかけを行った。 ○認知したものを適宜スクールカウンセリング（延べ8名）や医療機関へつなげた。 ○頻回来室（5回以上）の生徒への生活習慣に関する保健指導を実施した。	○生徒会メンバーが全校集会や各種グループワーク時に運営側として自主的に動いている様子が見られた。 ○保健室来室時の問診票や養護教諭の問いかけをきっかけに、自己の生活や現在の状況を振り返ることができた。
		② 共感的な人間関係づくりや集団形成を支えることで、生徒一人ひとりが個性的な存在として尊重されるような学校の雰囲気をつくる。	○特別支援も含めて個に応じた対応ができるよう体制を維持する。 ○集会やホームルーム等、様々な場面で自己の価値を実感できるような活動を行う。	A	○外部有識者を招聘して個別の生徒相談や職員研修を行い、組織として対応できた。（特別支援教育に係る職員研修9/3,12/5） ○集会やホームルームにて、自分も他者も大切にする、相手の立場になって幸せを考える意義等を伝えた。	○研修から、特別支援の必要性を感じ、教職員間の特別支援に対する共通理解が深まるきっかけとなった。 ○専門家の検査やカウンセリングを受けて、自身の強みを認識し、今後の取り組みを考えることができた。
		③ 学校行事やボランティア活動等への主体的な取り組みを通して社会とのつながりを意識させ、生徒一人ひとりの自己有用感を醸成する。	○学校行事（クラスマッチ、小規模校サミット、学校祭）において、生徒主体での企画・運営を行い、生徒のやりたいが形になるよう、生徒に寄り添い、ともに試行錯誤して実施する。 ○ボランティア活動等の外部とのつながりを推奨し、生徒に活躍の機会を数多く紹介する。	A	○生徒が主体となり、学校行事の目的を意識して活動できた。 ○ボランティアを地域貢献や自身のキャリアを深める機会と意識して手を挙げている生徒が目立った。	○学校祭では、昨年度の課題を踏まえて新たな提案を行い、より活気のあるものにできた。 ○ボランティアを通して地域と関わり、人との交流ができたことが楽しく自信にもつながり、よりボランティア活動に積極的に参加できていた。 ○白い森スポーツフェスティバルスタッフ（7名）、小国小学校授業支援(9名)、小国町キッズアートまつり(4名)、緑の羽根共同募金(13名)、小国警察署薬物乱用防止広報ボランティア(1名)、白い森柔道大会運営(3名)、)除雪ボランティア
		④ いじめのない学校を目指し、継続的にいじめ防止対策を徹底する。	○日々の生徒との対話の機会を大事にし、いじめの早期発見と対応を図る。（いじめグループ討議年1回、生徒アンケート年2回） ○保健講話や全校集会等、様々な場面で自他を大切にする心の醸成を図る。	B	○生徒会が中心となり、いじめグループ討議（5/31）実施し、当事者意識を高めることができた。 ○各種アンケートや調査、課会での情報共有等を活かし、適宜個別の面談や指導を行った。（いじめアンケート・学校生活アンケート：6/28,12/2実施） ○6/18薬物乱用防止教室を実施。警察官や少年補導専門官を招聘し、薬物やSNS等の身近にある危険についてご講話いただいた。	○保健室利用状況や保健調査結果、各学年での生徒の見取り等を生徒保健課会で共有し、生徒理解につなげ、組織で対応できた。 ○定期面談だけでなく、気になる点を見過ごさずに面談を組み、生徒の思いを受け止めることができた。
		⑤ 地域と連携しながら放課後活動の充実を図る。	○地域サークルの紹介を行うとともに、生徒のニーズと地域の取り組みをつなげてより良い活動になるよう、町高校魅力化推進室や魅力化コーディネーターと連携を図る。 ○アルバイトや大会等に参加したい生徒に向けての体制を整える。	B	○放課後の使い方について、自身で選択して活動できていた（何もしていない回答：29%程度）。活動頻度が少なく、継続的な活動になっていないものも多い。 ○町教育委員会や商工会のご協力もあり、アルバイト許可の認知が広がったことで問い合わせや求人票が増えた。（通年アルバイト届け出：11件）	○アルバイトの申し送り事項を整理できた。 ○町の芸能まつりに参加し、よさこいや太鼓など日々の活動の成果を披露することができた。 ○高体連主催大会出場（延べ2名）、西置賜駅伝出場（1名）、高校生花いけバトル東北大会準優勝（2名）
3　安心・安全かつ信頼される学校づくり	A	① コミュニティ・スクール運営やアフターコロナに合わせたPTA活動を実施し、学校・家庭・地域が一体となった活動を工夫して行う。	○朝のあいさつ運動を実施し、生徒の健全育成に努めるとともに、会員同士の交流を図る。 ○専門部の活動を計画的に行い、生徒の学びの場づくりに参画する。 ○各種外部講演会の内容をさくら連絡網を通じて会員に還元する。	A	○朝のあいさつ運動の保護者参加率は66%であった。 ○サミット・学校祭支援、夏祭り巡回を行った。 ○活動の様子をさくら連絡網で伝えた。	○生徒の健全育成に資する活動となった。それに加えて、保護者・教員との有意義な情報交換の場となり、その後の生徒指導に有益であった。 ○今後もさくら連絡網を活用していく。
		② 特色ある教育活動や生徒の活躍を積極的に発信し、学校の魅力を伝える。	○PTA会報「よこね」を発行する。 ○CNと連携して、アスモや中学校の掲示板でも学校の取り組みを紹介する。 ○学校HP・SNSで生徒の活動を適宜紹介していく。	A	○CNを中心に、SNSでの広報活動については積極的に行った。HPについては、10月以降、更新の頻度を上げることができた。 ○PTA会報については、2月末の発行に向け現在作成中である。	○SNSで写真を多用したことにより、生徒の活動の様子を伝えることができた。
		③ 危機管理体制の維持及び施設設備の安全管理により事故防止に努める。	○防災意識を涵養するため、防災訓練（安否確認初動訓練・総合型避難訓練）を実施する。 ○危機管理マニュアルを改定するとともに、教職員が常時閲覧できるようにする。 ○月一回の安全点検を実施し、安全管理に努める。	A	○危機管理マニュアルをデータでも紙媒体でも提示した。 ○学校安全点検も計画通り実施した。	○必要に応じて危機管理マニュアルを閲覧し、危機対応ができた。 ○安全点検の結果、修繕に繋げることができ、安心・安全な環境を保持できた。
4　教職員の協働体制の維持と指導力向上、心身の健康維持	B	① 各種研修を通し、同僚性を高めるとともに、「伴走者」としての教員の力量向上を図る。	○定期的に「白い森人」研修、特別支援教育研修、公開授業等を行うことで、資質の向上並びに職員の目線の一致を図る。 ○面談時だけでなく普段から研修に対する助言を行うとともに教育センター等の研修について声掛けを行う。 ○授業アンケート・授業評価・生徒の学習成果等により、指導と評価の一体化を図り、指導力の向上につなげる。	B	○公開授業、各種校内研修を実施することができ、指導力の向上や本校の教育課題への共通理解が図られた。 ○教員が多様な研修参加や学校視察等を行い、教科指導やカリキュラム検討等の充実が図られた。 ○授業アンケートを実施し、各教科指導の改善が図られた。	○教職員が本校の魅力化とその発信や教育課題の解決等に向けて研修等を行い、合意形成しながら校務を行った。 ○年間を通して、研修参加や学校視察が行われ、報告や成果発表、研究授業が行われた。 ○教科横断型授業等による授業づくりにかかわる協働や、校内研修による特別支援教育への理解が進んだ。
		② 業務改善を図り、ライフ・ワーク・バランスの向上に努める。	○学校や教員が担うべき業務とそうでない業務の仕分けを行うことで業務量の適正化を図る。 ○ICTの活用をさらに促進する。	C	○各業務や会議の持ち方等の見直しによる業務削減を十分に行うことができなかった。次年度の課題とする。 ○GGの導入により、校務のDXが進んだ。	○多くの校務において事務室・CN・校務補助員・SC等との協働が行われたが、業務のスリム化や進行管理が課題である。 ○休暇管理・旅行申請・会議資料・諸連絡・データ共有・学習指導等でICTの活用が促進された。
		③ 休暇を取得しやすく、風通しのよい職場環境づくりを推進する。	○職員間のコミュニケーションの促進により、全職員による仕事の分業化(集中化を防ぐ)を目指す。 ○定時退校や休暇取得をしやすい雰囲気を作る。	C	○校務分掌間でのコミュニケーションの促進と協働、各業務の早めの進行を十分に図れなかった。 ○年休や特休等の取得について、取得しやすい職場環境を整えることができた。早めの退勤により、ライフ・ワーク・バランスの取れた働き方を図ることができた。	○時期や担当業務によって分業化が難しく、業務量の偏りがある。 ○各自の業務管理による早めの退勤、代休・夏季休暇等の確実な取得があった。
		④ 教職員一人ひとりが働き方改革に対する意識を持ち、実行する。	○勤務時間を確実に掌握することで職員それぞれにあった業務遂行に対する助言を行う。 ○自分の勤務時間を認識するために出退勤時間の日常的なe教務への入力を促す。 ○日常的に定時退校の声掛けを行う。	B	○4月から12月までの時間外在校等時間の複数月平均が80時間を超える教員数が0人、1か月の時間外在校等時間が月45時間を超える月が6月以上ある教員数が2人であった。 ○働き方改革の趣旨を再度確認していく。	○時間外在校時間等を確認しながら、勤務時間内に集中して業務に取り組むことができた。 ○教職員は面談の実施や放課後の指導等、生徒と向き合う時間を取ることができた。